■ 書評

『日米地位協定入門』（創元社）

前泊博盛 編著

解説：小倉志郎

今年の３月１日に初版が発行された本書を私が購入したのは４月３０日。本文を通読したのは５月２３日だった。途中まで読みかけたところで、既に、この本のすごさに驚かされた。今の日本社会の異常さの根源をこれほどわかり易く書いてくれた本は初めてではないかとすら感じた。

編著者・前泊博盛さんは沖縄の宮古島生まれ。琉球新報社で２７年間記者をしていただけあって、沖縄の米軍基地問題が解決できない根源を追求する執念が伝わると同時に文章がとてもわかり易く、且つ、内容に迫力がある。

とにかく、条約や協定の裏に密約があり、その密約の裏にさらに密約があり、それらがみな米国の特権を容認する内容だというのだからあきれはてた。徳川幕府が幕末にヨーロッパ先進諸国と結んだ不平等条約よりもひどいのではないかと思う。　この本を読んで、日米安全保障条約と日米地位協定を併せたものは巨大な迷宮のようなものであることがよくわかった。外務省に入った優秀な官僚でも生半可な知識ではその迷宮の中で迷子になってとても仕事をすることはできないだろう。そこで、外務省の中では「日米地位協定の考え方」という外務官僚向けのガイドブックがつくられている。その内容は協定の解釈集であるが、ほとんど全てが米国が有利になるような解釈だというから、これにも驚かされる。この文書が最初に書かれたのは１９７３年で、１９８３年に増補版が書かれたが、共に外務省内で「永久機密」扱いになっており、現在も外務省はその存在すら認めようとしていない。

内容とは別だが、判り易さは先ず目次の立てかたがよい。

例えば、PART１では、⑧どうして米兵が犯罪をおかしても罰せられないのですか？（141頁）

⑫米軍はなぜイラクから戦後八年で完全撤退したのですか？　（199頁）

というように、具体的な内容がわかり易い言葉でどこに書かれているかを示している。しかも、一つひとつの項目の内容がコンパクトにまとめられていて、項目ごとに小さな勉強会の資料として最適である。

この本を読めば、前泊さんが「はじめに」に書いているように、アメリカと日本の関係が「宗主国・属国関係」であり、それが日米安保条約と日米地位協定という国と国の間で結ばれた法的約束によるものであることがわかると思う。だからこそ、沖縄で米軍ができて本土でできないことは何もないということだ。

この本が訴える日米の不平等関係には右翼も左翼も無党派も区別なく日本に住む全ての人々の運命にふりかかっている問題である。

この本を有権者の少なくとも半分が読めば、日本社会は確実に変わるだろう。未読の方にぜひ一読をお奨めしたい。

拙歌一首、ご笑覧を。

「日本では憲法機能しないわけ教えられたり前泊著で」

（元原発技術者）